
東方夜闇伝

龍竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方夜闇伝

【Nコード】

N4910Y

【作者名】

龍竜

【あらすじ】

神のミスで最悪な人生を歩き続けてそしてとうとう死んでしまった傭兵、しかし本当はもっと幸せに生き、殺し合いとは無関係な人生だったそして設定したはずの寿命も生きていなかった、だから転生する話

オリ主、恋愛関係もあるかも

最低でも完結を目指したいと思います

プロローグ（前書き）

初めまして、龍竜^{たつめう}と言います

書くことは、初めてではありませんが他の方々と比べるまでもない
文才ですが

それでも良いと、言う方は下へどうぞ

ブローグ

……ここはどこだ

目の前にはなんか真っ白な世界だったそして後ろを向くと

「すみませんでしたああああああ」

となんか白い羽？と真っ白な服装をした女性が土下座してた

正直言おう自分は死んだのかと思った、いやだって羽がある人がいる時点でそう思うじゃん？

え？冷静すぎ？それでも修羅場を結構潜ってきたんだ、どんな状況でも冷静で…

使う場所間違えてるな…

まあいいや

「で、ここはどこだ？俺は死んだのか？」

「はい、死にました」

「そうか、死んだのか…だがなんで土下座してるんだ？、死んだのなら死んだでいいじゃないか」

「実はですね、あなたは本当はもつと幸福で結婚もして 本当に普通に幸せに生きる人生でした、でも私のミスであなたは最悪の人生でした、そして神々で話あってみた結果あなたを転生させることになりました」

「ほう、転生となでも転生でも元の所に戻るのか？」

「いいえ、それはできません、あなたの魂はすでに道を歩み終わります、ですから戻すと…その場ですぐに死んでしまいます、ですから別の世界に送ります」

「別の世界？どうゆうことだ？」

「簡単に言うとゲームとかアニメの世界です」

「なるほどまるで夢みたいだな、でもどんな世界に転生するんだ？」

「東方っていう世界です」

「東方？…ああなんか聞いたことあるな、たしか妖怪とかがいる世界だろ？」

「そうです、あなたをその世界に送ります。あ、あと人種も選べますよ、あと要望があれば三回までできます」

「ふむ、人種は…妖怪…かな？要望か、じゃあ俺が使ってた接近系の武器全部とその武器を壊れないようにしてほしい　あとは闇系の能力がほしい」

「他はなんとかできます、なぜ闇なんですか？」

「闇だと色々と楽だろ？それに闇と言ったら強いイメージがあつてなそれに妖怪だろ？、なら闇っていえば恐怖の主張だと思うんだ」

「あなたはなかなか頭が切れるみたいですね、わかりました闇を操る能力にします、これは努力次第ではもっと強くなります」

「ありがとう、では送ってくれ…ああそいえばまた会えるのか？」

「会えますよ、こちら問題が起こればそっちに知らせるようにしますから」

「わかった、色々と感謝する ではまた会おう」

「はい」

……………で、どうやって送るんだ？

「ではまた会いましょう」

…うん？なんか立ってる感覚が…

「うおおおおおおおおおおお」

足元に穴が空き俺はそのまんま落ちて行っ

プロローグ（後書き）

どうでしたか？

感想や誤字報告があればよろしくお願いします

主人公設定（前書き）

主人公の設定です、いつか書くと思って書き溜めしてたりします

主人公設定

オリ主

ゼロ・ブラック・レリック

特徴

真っ黒な服装と真っ黒の髪と真っ赤な眼が特徴

容姿

髪 of 長さは非常に長い腰まである

顔だちはかなりのイケメンてか完ぺきなイケメン十人中九人がイケメンと言っほどである

体系は無駄な筋肉がない痩せマッチョ

性格 冷静

属性 闇

能力

闇を操る能力（程度が無いのはかぶらないため）
あらゆる武器を扱う能力

主「以上です、武器とかは話の中でお願ひします」

「おい、主」

主「ん？どうつたの？」

「転生前のこと書かなくていいのか？」

主「だって、過去話としてだす予定だしいの話は脳内でつくってたし」

「お前って結構暇人なんだな」

主「うん今は暇人だよでも設定書くのとか楽しいからねゲーム感覚でオリキャラとか考える楽しいし」

「そうか、で、なんで俺の所に名前がないんだ？」

主「実はね、あの名前だと色々と問題があるんだよ　だからある程度厨二の名前を考えてるんだ」

「それでも俺の名前なんか厨二だぞ」

主「何を言ってるんだ厨二って言うのは物語とかには絶対必要だから結構必須だぞ、その前に厨二乙って人の認識がおかしいと思うんだ、リアルとか抜きにして」

「それも…そうか…？」

主「そうだよ、あ、このまんな行くと終りそうに無いからここまでにするね、次回また会いましょう」

一話 眼が覚めたらなんか恐ろしい時代にいた（前書き）

では一話目ですよろしくお願いします

一話 眼が覚めたらなんか恐ろしい時代にいた

「う……………ここは？どこだ…」

周りを見渡すと木、木、木、木、足、木…足？

「GYAAAAAAAAAAAA」

…さて今俺は目の前の物に眼を疑うけど相手はまってくれない

「がああああ」

「うお！つと、なんでTレックスがいるんだよ…！！！！」

俺は即座に腰に在る武器を確認する

「剣が4本と大剣が1本…十分だ…！！！！」

確認を終えた俺は相手の動きをけん制しながら剣を抜く

今持つてる剣の名前はオメガブレード、俺の武器を作ってた人があ
るゲームから付けた名前だ色は紫の刃が特徴である

相手のTレックスは前に態勢を傾け初進をつけて突っ込んできた

おそらく俺を弱らせてからゆっくりと食うつもりだろう

だが残念ながらその程度だ

「はぁぁぁ!!!!」

「ぎゃぁぁぁぁぁ」

俺はサイドステップで突進を避けてすれ違いざまに足の付け根を斬る
スピードを殺しきれなかったTレックスはそのまんま転んだ

おそらくこいつはもう駄目だTレックスってのは微妙なバランスで
立ってるため筋力とか半端じゃない
が片足でもダメージを受けると立つことすらなくなる

「もう、長生きは無理だろう？今回は俺の勝ちだ、おとなしく食料
になってもらう」

俺はそのまんま大剣を首に振り下ろす

「しかし面倒くさい時代に送られたもんだ、おっと神様聞こえるか
い？」

（はい、聞こえてますどうしましたか？）

「能力ってどうやって使うんだ？」

（闇ですから、まあイメージです）

「イメージか…わかったありがとう」

(いえいえでは)

「イメージねえ、そうだ!」

俺は右手に少しだけ何かを出すようにイメージした

そしたらなんか真っ黒な何かがあった、テニスボールくらいの大きさだ

「これが闇…か」

投げてみたらどうだろうと思ひ、振りかぶって思いつきり近くの岩に投げた

そしたらどうでしょう、岩だけじゃなく岩場がけしとんだよ

「…なん…だと、すごい威力だこれはちゃんと調整できるように訓練しないとな」

俺はそう思いながら寝ることにした場所は木の上だ、なぜかって? 寝る場所ってあんまりこの時代だと安心できる場所がないんだよ

次の日

俺は闇を武器の形とかにできないかと思っでやってみる

そしたら色々大変だった なんとか武器の形にはできたけどその武器からなんか闇の力っぽいのが溢れてて地面に当たるとなぜか地

面の草が焼けたようになるからだ

すぐに消したけど自分の周りは焼け野原みたいになってしまった

やれやれと思いながら獲物を探す、今日はトリケラトプスかな 目の前に群れがいる

俺は夜を狙って子供を斬り殺し引きずっては剥いで食べれる所を全てとり、残った部分は埋めた

とかまあこんな感じに何年も過ごした

100年以上はたったと思う え？飛ばしすぎ？だって毎日練習と訓練と狩りの毎日だぜ

そんなのみてどう思うよそれと隕石が落ちてきた超巨大だったよ

それと今は氷河期だ

なんか恐竜の時代でもかなり後期だったらしい、俺は目の前にいる超でけえトラとやり合ってる

正直でかすぎだろ、たしかサーベルタイガーだったか 現在の生き物の中で最強だと思うその巨体

こんなのに乗っかられたら食われるだけ、俺じゃなければ

俺はこれよりでかい奴を嫌というほど相手にしてきたんだこの程度どうにでもなる

少し隙をだすとそこを突こうとする、俺は的確に頭を切り落とした
「これで、また食料ゲットっとそれにしても何年たったかなーおつ
と肉が凍る！！」

実は闇つてのは便利だ、50年以上前にきずいたけどこれ物を焼く
こともできるし、翼にすれば飛ぶこともできる、あと最近できるよ
うになったけど闇を形にできるようになった、剣にすれば普通に剣
にもできる切れ味は自分で決めることができる、本当に闇は便利だ

氷河期がやっと終わった

万年くらいの年だと思う

自然も戻ってきたし、人間いつかなー

と思って、久しぶりに空を飛ぶと北京原人がいた…ここって北京な
んだ…

人間となるまで俺は狩りと練習と訓練を毎日のようにやった

何百年かたったきがする、適当？何を言ってるんだ自分の位置がは
っきりしないし、カレンダーもないような時代でどうしると

まあそれは置いて、なんか未来都市っぽいのがあ

俺は自分の妖力を抑えて町に入ってみる

門があり、そして2011年には無いような物まである俺はキョロキョロしてると目の前になんか可愛い子が俺を見上げてた。

「ん？どうしたんだい？」

「どうしたのはこっちの台詞よ、キョロキョロして」

それもそうか

「それはすまないな、初めて来たもんで 俺は…ブラックだ、きみの名前は？」

俺は名前を簡潔に言う

「あら、ご丁寧にどうも私は八意 永琳やいりん医者いしゃの見習いよ」

医者か…小さいのにすごいな

「俺は旅人かな？、まあ眼についたから来ただけだね」

「じゃあ家に来て！、旅人なら色々なことしててるでしょ？」

「……………わかった行こう」

俺はひとまずついていくことにした

そして向かって行くとなんかすごい大きい家がある、見方によっては城にも見える

俺が門の前までいくと

「止まれ！何者だ！お嬢様をどうする気だ！」

「まって私の客人よ」

「……………わかりました」

お嬢様？なんかすごい人に眼を付けられたもんだ

そして俺はそのまんま永琳の部屋と思われる所にきた

「座って、今お茶をだすから」

この年でお茶か…随分と礼儀正しい子だ

「ありがとう」

ずずっお、かなりうまいな

「随分とおいしいお茶だな、誰に教えてもらった？」

「あらありがとう、これは自分で調べたのよ」

なんと自分で調べるしてだど！、この時代ではお茶っていうのはあんまりと思ってたんだが今日は何度も驚かせられるな

「それより、旅の話聞かせてよ」

「ん、良いぞ　どんな話が良い？」

「じゃあ外はどんな動物がいるの？」

動物か…最近妖怪と思われる生き物が出てきてるからどうだか

「ふむ、色々いるぞ　でもあんまりいいのはいないな、あつても…
………」

と色々な生き物の話をした、それと自分の名前を変えたいことも

「なんで名前変えたいの？親からもらったんじゃないの？」

それもそうだが俺が転生してきたなんて言えないわけだ

「実を言つと俺のいた所ではある程度歳をとると名前を変えるんだ
でも俺は異端者でな、追放されたからな」

つて言ってしまった正直これが失敗だった

「そうなの……じゃあしばらく行くあてがないならここに泊まっ
たら？」

「いいのか？」

「いいのよ、ついでに名前も考えましょ」

「本当に何から何までありがとう」

「では名前を考えましょう、ん」

俺も考えるがあんまり良い名前が思いつかない

「じゃあ、闇夜は？」

「闇夜？、なんか良い名前だなうんそれにしよう、ありがとう」

「あらそれでよかったの？」

「ああ俺には十分な名前だ」

「じゃあ闇夜、これからよろしくね」

「よろしくするのは俺の方だがな、では改めてよろしく」

「ええよろしく」

こうして俺の名前が決まった

やみよ
闇夜

この俺には十分名前だ

一話 眼が覚めたらなんか恐ろしい時代にいた（後書き）

主「よしできた！闇夜って名前どうかな？」

闇「ああ、とっても良いと思うけどこれでいいのか？」

主「俺としてはあんまり良い名前が浮かばなくて闇 読み方 って調べたら即効で出てきたからこれにした」

闇「適当な割には良いと思うな」

主「俺もそう思う、おっとこのまんまだと終わりがなさそうだからここで終わるよ、感想とか誤字とかここがおかしいとかお願いしますではまた」

二話（前書き）

二話です、修正してたら遅れました

あとやってみたい書き方を主にやりました
読みにくいかあったらお願いします

二話

俺は眼を覚ました

軽く周りを見る、質素な部屋だが野宿よりマシだ

ひとまず俺は着替えることにした、上着を脱いだところにドアからノックが聞こえた

なぜドアと思うけど外が和風に見える割には中が洋風だったんだよ
すごいよな

それはそうと返事しなければ

「はい」

「闇夜様、朝ご飯ができたので食堂の方へお願いします」

「わかりました」

そして着替え終えた俺は食堂へ向かう、しかし良いにおいだ

「おはよう」

と永琳

「おはよう」

と永琳の親父さん

「おはようございます」

と俺も返して席に着く、そしていただきますと言って食べ始めた時
親父さんが

「闇夜さんだったな、どこ生まれかな？」

「かなり遠くの山奥です」

正直良心が痛むが、しかたないかな

「ほお、じゃあかなり遠くからきたんじゃな理由は聞いておるよ何
が原因かな？」

俺は永琳をチラと見た、小さくごめんと返され俺はしかたなく

「まあ俺は妖怪と人間のハーフなんで」

と出まかせを言ってしまった、親父さんは眼を大きく見開き 永琳
もおなじなようだ

「ほう、妖怪とか人間か…すごいものそんなこともあるのか」

なんか関心された、そのあとは他愛もない話で盛り上がった

朝食を食べ終わり俺はこの家の書物を読んでみることにした、すごい
量だ

ひとまず妖怪に関しての資料を読んでみようと思う、しかしいっぱ

「いるな……ん？No1～No98多いなあ
まあいいや、片っぱしから読んでやろう」

「ひとまず今日は時間をフルに使って、No9まで読んだ」

「ここまでで、わかったことは妖怪は普通に何千年も生きるらしい、
俺何万年か生きてるんだけど」

「今日も平和だと思って寝ることにした」

「次の日も同じように書物を読みふけるが、たまに永琳から血をとられる」

「そして書物に戻ろうとしたら親父さんに声かけられた」

「妖怪退治？」

「そうじゃ、長い期間旅してきたお前なら問題ないとおもってな」

「妖怪かーどんな奴ですか？」

「そこらへんにいる奴じゃ、数が多く手のこの町を開けるわけにも
行かないし困ってたんじゃ」

「まあ住まわせてもらってるしいですよ」

「そうか、わかった明日からお願いするよ場所は明日地図を渡すからちゃんと準備するんじゃよ」

俺はいつも通りに準備をする、武器の確認と非常食の確認をした水も確認して、服装をどうするか迷ってる

実は闇つてのは服にもなる、原理は不明だが剣と翼を作れる時点で予測できる

本当に闇つてのは便利だ

次の日俺は永琳に見送られながら討伐に出かけた

言われた場所は山の奥深くで谷があつた滝が枯れたのか知らんがすごいでかい、奥は真っ暗で本来は見えないが俺の眼は非常に暗いのに強いこれも闇の妖怪のおかげだけだね

谷の真っ暗なところを見てみるとすごい数の妖怪一匹の妖怪の周りにいる、すこし力がある妖怪だろう言葉をしゃべってる

聞く限り町を襲撃する準備をしてるようだ、それにしても数だけはすごい万いるかな？それはないか

こいつらを蹴散らすのは簡単だ、でも数的に皆殺しは無理だ 絶対に何匹かには逃げられる

こうなったら俺に集中的に狙わせて町から遠ざけるつてのがある

失敗すれば俺に依頼したのが妖怪にばれて町に向かわれるがうまく行けば俺の修行にもなるし、町も守られる我ながら良い案だと思う

思えば烏合の衆だ、大将を兆発しておけばいいんじゃないかあの大将は馬鹿そうだしやってみる価値があるな

「おい」

「ん？何だ貴様は！！」

「お前が大将だよな？」

「そつだ人間よ、どうした？俺らの食糧になりに来てくれたのか？」

「嫌？違うが」

「じゃあ何しに来たのだ、まあどっちみち食ってやるけどな」

「じゃあ食ってみるよ、まっ無理だろうけどな」

「なんだと！お前らやつちまえ」

「どうした？来ないのか？捕まえて見せろよ」

「うがああああ、ゆるさんぞ人間捕まえて八つ裂きにしろ、町は後だああああ」

作戦成功、結構バカだなほんと　でも兆発が苦手だったからどうしようと思っただけどうまく行くもんだな

それより沸点低くね？まあ成功したんだしいいか

さて永琳に連絡しとくか、闇をうまく使うと言葉も載せれる、本当に闇便利

（妖怪を連れて遠くに行くよ元気で）

怒りが冷めるだろう時に合わせて兆発を繰り返し、どんどん離れていく二日以上走り続けたけど妖怪の群れはかなり増えてきた、…増えてきた？どうゆうことなの、そこで俺は後ろをチラっと見てみたそしたら

「よう、一緒に人食わないか」的なことって呼び出してた。正直数が半端じゃないこの数だとあのあたりの妖怪ほぼ

連れてきたみたいだ

さらに三日走り続けた妖怪達にも疲れが見え始めた、しかしなぜか餓えの方が上まわったのかガンガンとスピード上げてくる

しかもよだれ垂らしながらだ、正直そろそろ飽きた そう思ってたら開けた場所に出た

俺はある程度平らな所で向かってくる妖怪の方に闇で作った壁をつくり先頭にいた妖怪の突進を止める

そのあと俺は立ち止まってるため妖怪達は俺を囲み始めた、俺は周りに壁を作り抜け駆けしようとする妖怪を止める

完全に俺を囲み終えた所にあの馬鹿面妖怪がでてきた

「やっと…ぜえぜえ追い詰めた…ぜえぜえ追い詰めたぞお、おとなしく俺に食われる」

なんつつか、すんげえ迫力もなんもない威厳もないなと思ったが俺は気づいた

こいつに元々威厳もなかったな」

「なんだとこの野郎！」

「うん？どうして分かった？」

「声にだしてたんだろうが！！！」

声に出てたか、さて足音も聞こえなくなったしそろそろまじめにやるかな

俺は開幕に手から妖力を込めたレーザーを撃つ、大きさは……かなりの大きさだ多分全高5mぐらいだ

「ギギッコロシチマエエエ」

とうとう餓えて我を失いかけてきたか、さっきまでまともにしゃべってたがどうやら絶好の餌を目の前にしてとうとう理性の方が崩壊したようだ

俺はひとまず全力で消し飛ばすことだけを考えて砲撃をする、あの

馬鹿大将を先に倒すと指揮が崩れて逃亡するのが出るからだ。全てを殺しとかなないと妖怪共はやけを起こす可能性がある。だから全力で一匹残らず消し飛ばす

「ギギツオマエドウゾクダッタノカ」

聞き取りにくい声だ、それにしてもいまさら気づいたのか？やっぱ馬鹿だな

実は俺は走りながら妖力を使いながら走ってたから体力はあんまり減ってない

「「「「ギヤアアアアアアアアアア」」」」

妖怪達は叫びながら素早く飛び込んでくる、しかも直進力しかないような動きだ 俺は横にギリギリで避けて背中に回し蹴りをする

このままだと押し切られるかもしれない、そう思った俺は妖力を全て使いきるように闇をかき集める

勿論ある程度動き回る、少し暗くなってきたおかげか闇を集めやすいかなり闇を集めた、おそらく人間から見たら真っ暗だろう

闇の影響で瘴気が出てきた、妖怪達がすこし苦しそうだ 俺はその闇を全方向にぶちかました

「「「「「ギヤアアアアアアアアアアアアアア」」」」」

「」

さっきまでの平らな野原は真っ赤だった。が今は焼け野原より酷く、草一つも木が一本もない。

在るのは俺だけ、俺は永琳の所に向かおうとした。

その直後地響きが聞こえてきた。

スペースシャトルみたいな物が空高く飛び始めた、俺はまさかと思いきい急いで町にもどった。

町はあったけど、門も壁も跡はあった。家は全て焼けた跡があった。が家には見えない。これは町と言えるのか。否。町だった物がそこにあっただけ。

周りの木は枯れ、水は汚れてる。俺はこれを見て思った、核汚染って奴だ。

妖怪に恐れてたから門を作り、壁を作ったはずだ。まあ光線銃は抜きにしてだ。

核？なぜ…俺は闇を纏いながら永琳の家だった所に戻る、家はほとんど残って無かった。

何か残ってないかと思っただけど何もなかった

何かあったのか？その疑問に答える人はいない

俺はまた独りになった

独りはもう慣れた、だけど久しぶりにあった人間だった 悲しいとは思わない 寂しいとは思わない

いつか合えるだろうと思った、だからそれまで生きておこうと思う

このあたりにいた人間はいなかった、俺は日本になる予定の島へ向かうことにした

でも妖力を使いすぎたらしい、眠い 俺は何とか日本に来れた、けどもう限界だ

俺は闇の妖怪だからか洞窟はすごい住みやすい、妖力を吸収する速さもかなり早い

でも年百年近くの妖力を一気に放出したのはまずかった、力が入ら

ない

俺は最後の力で結界を張り、闇で作った毛布もどきを纏った

次はいつ眼を覚ますか、人間はいるのか次はだれと出会えるのか
楽しみでしかたない

そう思い俺は眼を閉じた

二話（後書き）

主「やっとできました、二話！！、荒井スミスさん感想をありがとうございました！」

闇「おい、色々と中途半端と言われたぞこれからどうする」

主「厳しいです、書いた奴を今から修正しても良いんですが、俺のことですから絶対ミスります」

闇「それより今回色々と無理やりだな」

主「だって永琳の所かなり難しいんだもん、三つほどルート考えたけどそれ以前にどうやって月に送るかだったし」

闇「まあ、お前の力量なんぞわかってるしな仕方ないとはいわんぞ」

主「仕方ないで終わったらどれだけ楽か、でも自分の力量はわかってるつもりだから自分のできる限りのことをするよ」

闇「それと俺あんまり喋ってないな、面倒くさいのか？」

主「いや？面倒くさいだったらSSなんて恐れ多くて書けないよ、実は自分の力不足でキャラを表現しきれないのが一番こわいからね、でもいつまでも力不足とか言ってられないから俺は他の方々のSSを参考に行きます、できればレベルアップして行きたいです。ですから感想をください、要望があれば聞きますので、では次回で会いましょう」

現在の幻想郷での妖力関係で強い順、
妖夢＞咲夜 魔理沙＞
レミリア ゆゆ様＞フラン 紫 霊夢＜＜＜闇夜（現在）
（主の中では）

あと今回は闇夜視点を集中的に書きました、明日には永琳編も送ります

二話 永琳視点（前書き）

遅くなりました、良いわけはしません本当にすいませんでした

まあ理由が部活が厳しくなったのが原因ですけどね

あと今回は永琳視点です、時系列は永琳が夜闇に出会う寸前からです
あと短いです

二話 永琳視点

今日もいつも通りの少しつまらない日だと思ってた、いつも通り新しい薬を考え実験しようと思ってた。でも素材が切れてたから外に出てきたけど切れてた物が妖怪血だった、私は考えた妖怪は人間と違いあらゆる能力が高いその中に勿論治癒力と寿命がずば抜けてた私はどうやって妖怪の血を得るか考えてた、その時少し変わった人。もとい妖怪が歩いてきた

変わったというよりかなり浮いてた、なぜかそれは真っ黒な服装、真っ黒な髪しかもかなり長い、違うと言えば赤い眼だ

どっから見ても妖怪にしか見えないが他から見では人間に見えるらしい

少し近づくると妖怪は周りをキョロキョロしていた、偵察？と思ったけど違うと思った 理由は簡単眼が好奇心でいっぱいになってた。

こんなに純粋な妖怪もいるんだと思いそして思いついた、その妖怪、彼から血をとれば良いのだと考えた

そして声をかけてみたしたら嘘をついた、すぐ嘘と見抜いたのは彼が妖怪だと言うことも知ってたのもあるけどこの町以外に人間はいない、あと数か月にはこの星からあの月に行くのだ 周りの妖怪はここを襲撃しようとしてるのもわかってる

だから周りの人間の集落、村から人を集めた ここをある程度守るために

彼に話かけたら名前がブラックというけど変えたいらしい、本来の名前ではないと言うのだすこし変わった人だと思った

私も考えた、彼は夜の名前がよく似合うのだ、なぜかそれは彼の雰囲気だろうかよくわからないけど夜を集中的に考えた

結果夜闇、夜の闇 無限に続く永遠の闇だ そして広大な闇でもある 彼はどれくらい生きてるのか知りたくなってきた

彼のことを家に泊める代わりに父さんに彼のことを言った、けど全部は言わなかった全部言うと彼は殺されるからだ

私は彼が妖怪混じりと言った、そしたら父さんは実験に使いなさいと言った。私はたしかに実験に使う気だったが彼を知りたいという方が強かった

まずは彼の日常を見てみた、彼は基本 本しか読まないことと自然を見るのが好きだと知った

今度は私は彼の血をもらうことにした、そしたら普通に血をくれた 考えてみたらそれが唯一彼の私から見ての普通だった

理由は簡単、なぜ字が読める？ご飯を食べる時だって箸だって簡単に使った、私達の調べだと今の妖怪達はあんまり賢くない

だけどなぜか彼はそれができて、私は彼はどんな妖怪か知りたくなって彼からとった血を調べた

結果彼は純粹な妖怪だが今の妖怪とは違う、今の妖怪と完ぺきな違いは生活や知識だけではなかった

彼は現在で最古の妖怪なのがわかった、正直いって私は彼をNO109に書き記した、

種族：妖怪

現在で最古の妖怪

私は今書けることを書いた、少ないと思うけど彼のことを知るには血だけでは少なすぎる材料だ

簡単に調べた物だから時間があればもっとわかるだろうけど、月に向かう時間が近いそしたら夜のご飯の時に父さんが彼に妖怪退治に向かわせる話をしてた、おそらく父さんは彼をおとりにするつもりだろう次の日には月に向かうことになってる

私は資料を全て持ち、彼の血が入った試験管を丁寧に入れるかこれは絶対に守り抜く必要がある

そして時間が来た、彼は妖怪退治にむかった もう彼と会うことはできないだろう

そう思ってた時、目の前に真っ黒な鳥が降りてきてこう言った「妖怪を連れて遠くに行くよ」と

私は彼が妖怪を説得したのかもしくは…と思った

でも遅すぎたもう行かなければならない、今度は合えるのはとって

も難しいまた会えればいいと思った

私はそう思い艦に乗り込んだそして月に向かい始めた時何かが爆発した

私達の町に妖怪達が来たのだ、そしてそれを感知した防衛システムが起動して核爆発を起こした

でも私は何も思わなかった、彼は遠くに行った、ようするにこの核の光を浴びる必要がないのだ、私はそれを知ってたからまた会えると思った、いや会いたいと思った

この星から出た、通称地球 蒼く綺麗だったそして私は心の中で「またね」とつぶやいた

二話 永琳視点（後書き）

主「遅くなつてすみませんでしたあああああ！！」

夜「許さん！部活が忙しいのは知ってたがこの程度で疲れるとは…」

主「それでも運動は得意だ！！ただ体力がないだけだ…まあいいや」

夜「はまあいいぞ、それにしても永琳視点とは面白いな、よく思いついたな」

主「実は夜闇視点が普通なため他の人視点があんまりでないのだ、だからこうやった」

夜「しかし駄文だな本当に」

主「言うな、自覚はある、遅くなつてもこうだからもう泣きたいぜ」

夜「それより、今度はいつの時代だ？」

主「まあいいか、次回は諏訪大戦の時代だよ　そして夜闇はどちらに着くのか？」

夜「俺参戦確定かよ」

主「そらそうだ、いくら妖力隠しても億年以上生きた妖怪がこの時代の神に隠せるはずがないだろ、それと夜闇はぎりぎりまで妖力を隠してるけどそれでも上級妖怪に勝つことぐらいできるよ」

夜「俺強すぎだろ、まあ傭兵やってたし世界観はモンスターとか普通にいるしな」

主「その通り、単純な戦闘能力はすでに人外だよ、Tレックスとか相手にしてそして氷河期を生きたしね、あと夜闇が寝てる間にも氷河期が訪れてるからね」

夜「なん……だと」

主「実はあの月に向かう際に発動した核爆弾は世界中と連動するようになってたんだよ、あれで地球は強制的に氷河期が訪れたわけ」

夜「なるほど……しかし世界中とはなんでだ？」

主「地球上の妖怪全てを殺しつくそうと考えたんだよ、でも夜闇の場所は運よく核が爆発の風圧以外が来てないよむしろあの時の夜闇のフルパワーの広域攻撃の方が威力が高くて丁度夜闇をそれたんだよ、ん？相殺したって方が正しいか」

夜「俺とんでもないな、でも実際核直撃したどうなってたんだ？」

主「すこしやけどするぐらいかな、まあ当たることはないけど」

夜「なんでだ？」

主「お前の戦闘経験と反射神経で即座に相殺するからだよ当たり前」

夜「それもそうかこれでも経験豊富かつ、力も世界最凶だしな」

主「まあねそれくらい……強くしすぎたか……イレギュラー入れるのも

いいかな」

夜「ん？何ぶつぶついつてんだ？」

主「いや？なんでもないよ、おっとここまでにするか次の話も骨組みはできてるからあとは肉付けだけだよ

あと感想、ここがだめとか教えてくださいますように直せるように努力しますのではまた次回！」

3話（前書き）

遅くなりました理由はあとがきで

3話

はいつまで寝ていたののだろうか、あの時からどれくらいたったのか
俺はひとまず腹が減ったし喉も乾いたから水を飲みについてから何を
食うか考えようとしてた

そして寝ぼけてて気がつかなかったが、なぜか俺が寝てたところの
すぐ横に銀髪の少女？ばいのが寝てる

俺はなぜここいるのか聞きたいがひとまず同族と思った、ここは俺
が静かに寝てたいから強力な闇の力を捲いたからである

この闇の瘴気に並みの妖怪は一瞬で命が無くなるほどだ　だがこの
闇の洞窟（今命名）普通の大妖怪でも無理だと思う

なぜなら妖怪も自然と同じような物なのだ、人間が、生き物が自然
と恐怖する物それが妖怪

だから自然の生命力も吸い取るこの闇相手では闇系統の妖怪以外だ
とすぐに死に至るほどだ

だからこの少女は闇系統の妖怪だと思う、この闇の瘴気の中ですよ
い安らかに寝てる

「ん……………」

「お 眼を覚ましたか」

「……………」

ん？なんか様子がおかしい？

「……………っ！！」

闇で作った大剣を横に一閃してきた

「うおっ！！」

なんとか避けることができたけど…なんだ？

「なんだいきなり攻撃して、俺は敵じゃn（ブン！）っく」

俺が喋ってる時にも攻撃してきやがった、これは聞く耳持たずってところか

どうする……相手はおそらく上位妖怪で闇…同じ系統の妖怪だが…
やっぱ力でねじ伏せる…か？

そう考えてたら銀髪の少女はもうこちらに斬りかかってきてた

ブン！

「あぶっ！！！！」

間一髪だった、もう少し遅ければ頭と体は一生離れてた

「ちいつ！ふん！」

かろうじて避けたのもばれてたのかすかさず恐ろしく鋭い攻撃をしてくる

ガギイイイ

なんとか剣で受け止めたがこのままじゃ相手に一方的にやられるだけだ

ガッ

「ふん！」

ガギイイイイン

はじいて距離をあけることができたが相手は明らかに本気だ、こちらでも本気で行かなければ

「はあああつつー！」

横一線

「！！つつ」

相手は確実にひるんだ、もう一度！

「せえええいつつ！」

さらに重ねて一閃

「っ！」

相手はなんとか防ぐことができてたがとうとう耐えきれなくて吹き飛ばされる

そしてなんとか立とうとするが俺は首もとに剣を突き付けた

「俺の勝ちだな」

「……………」

「?どうした」

「…痛い……………」

「それは悪かったな、だがお前から仕掛けてきたんだぞ？」

「わかってる…………強い……………」

「それは伊達に何万年も生きてるからな」

「何万!、私は……………」

「まあ別にいいよ?それに寝てて隣に男がいるんだもんな」

「違う、ここは良心地が良かったから一番良いところにきただけ」

「…要するにお前はただ単純に良心地が良いところを探して俺の所
にきたと」

「そう」

「そうか…そいえばお前、名前は？」

「名前？」

「そう、名前因みに俺は夜闇だ」

「私は………無い」

「無い？」

「いや知らない」

「知らないどっちだよ…まあいい、名前が無いのか？」

「そうかもしれない」

「……じゃあ名前をつけよう」

「え？なんで？私は……闇なんだよ？妖怪でも闇を嫌うんだよ？」

「俺は闇の妖怪だ」

「……………」

「忘れてただろ、ここにいる時点で俺は闇の妖怪なんだよ」

「……………」

「まあ名前いらなら別に良いけど」

「！名前…欲しい！」

「そうか…………さて名前をどうするか…………そうだ、白夜は？」

「白夜？、どうゆう意味？」

「全てに平等に光を当てる物の名前さ、ずっといつまでも長い時間照らし続ける物だ」

「…私が…照らす？…………私が闇でも照らせるかな？」

「ああ照らせるとも、暗闇があって初めて照らせるんだからな」

そう言った俺は白夜を連れて洞窟を出た

「！まぶしい…」

初めて太陽の光を浴びたように見えた、俺はなぜか彼女に世界を見せてやりたいと思った

3 話（後書き）

主「遅くなりましたー！！あと無理やりしませんでしたー」

闇「遅すぎだろ、また部活か？」

主「はい、部活です、もうなんでかいきなり厳しくなってきたね、家帰ってきたら満身創痍状態だし」

闇「だが遅れた原因ではないだろう？」

主「……………はい」

闇「まったく、それでいきなりオリキャラか？」

主「はい、白夜ですが元ネタは空亡そらなきです」

闇「おいおい、たしか百鬼夜行の最後にでてくる妖怪だろう？なんでこの時期に」

主「俺が好きなのだけなのが理由だけどね、まあ所詮元ネタだから空亡ではないよ」

闇「まあそうだな空亡なんて表に出たら世界が闇に染まるって言われてるしな」

主「そうだよ、あと絵はググったら出てきたから自分で調べてね、

「応容姿も載せようか、ではどうぞー」

名前 白夜

種族：妖怪（闇）

元ネタ：空亡^{そらなき}

能力：闇を操る程度の能力

容姿：髪は銀髪

体の大きさは150cmぐらい

簡単に言うと中学生2年生ぐらいの女の子

性格はおとなしい、無口

顔はかわいい、10人が10人美女と呼びそうぐらい

目の色は蒼色

主「簡単に言うところな感じかな」

闇「簡単だが分かりにくいぞ？」

主「ごめんなさい…正直本当に容姿不明の妖怪だから……」

闇「まあそうだな、色々あるしなたしか球体だったり、竜だったり、上の容姿みたいな感じだし」

主「闇夜よ、わかってくれるか」

闇「ああわかるとも、それにしても鳥頭のお前でもよくできたな」

主「鳥頭はよけいじゃあああああ」

闇「喧しいは！そおい」

主「ひでぶつ！おいてめこら何いきなりなぐってんだよ！」

闇「ああ五月蠅い！、終わりがねえだろうがあ」

主「あ」

闇「え？お前忘れてた？」

主「イヤ、ゼンゼンワスレナカタヨ？」

闇「主よ、あとで裏へこいよ」

主「だが断る、逃げるが勝ちだあああ」

闇「む、主が消えてしまったか、では次回に会おう 次はやっと原作のあの人だ、お楽しみに」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4910y/>

東方夜闇伝

2011年11月24日21時55分発行